11 月 6 日のメッセージ

聖書：創世記　18：　1－15

「主に不可能なことがあろうか」

「主に不可能なことがあろうか。」(創世記 18:14)

もちろん、これに続くの言葉は「いや、ない」しかありません。全能の神に不可能はない。当たり前のことのはずなのに、つい私たちはこの事実を否定したくなります。自分という物差しに神を押し込めようとしてしまうのです。

先日、『パペットアニメ　聖書物語』というビデオを見ました。アブラハムの物語、ヨセフの物語、ルツの物語がパペット(人形)アニメーションで描かれていました。その中で、アブラハムの物語に登場する妻サラは、事あるごとに夫に反論する姿が印象的でした。例えば、甥のロトと左右に分かれる場面では、ロトの選んだ低地の方が魅力的だと文句を言います。奴隷のハガルをアブラハムに自ら差し出しながら、いざ彼女が妊娠すると、彼女に辛く当たってしまいます。

しかし、考えてみれば、そのように振る舞うのも当然かもしれません。アブラハムには神の言葉が直接聞こえましたが、サラはアブラハムを通して知っただけだったからです。生まれ故郷を離れて旅立つこと(「主はアブラムに言われた。『あなたは生まれ故郷／父の家を離れて／わたしが示す地に行きなさい。』」創世記 12:1)も、子孫の数が星の数ほどになること(「主は彼を外に連れ出して言われた。『天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。』そして言われた。『あなたの子孫はこのようになる。』」創世記 15:5)も、何もかも又聞き。だから思わず、口答えしてしまうのでしょう。

それでも、神は約束を違えられません。自ら彼らの元に出向き、「来年の今ごろ、必ずここにまた来ますが、そのころには、あなたの妻のサラに男の子が生まれているでしょう。」(創世記 18:10)と伝えられます。直接言われてもにわかに信じられなかったサラは、結局、自分の物差しで測って笑ってしまったのですが(「サラはひそかに笑った。自分は年をとり、もはや楽しみがあるはずもなし、主人も年老いているのに、と思ったのである。」創世記 18:12)、それでも神の約束は確実でした。言葉通りに 1 年後、イサクが生まれ、救いの系譜は連綿と続いていくことになります。

もっとも、救いは過去の業績や血統によって与えられるものではありません(「悔い改めにふさわしい実を結べ。『我々の父はアブラハムだ』などという考えを起こすな。言っておくが、神はこんな石ころからでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる。」ルカによる福音書 3:8)。「悔い改めにふさわしい実を結ぶ」者たちに与えられるものです。それは、神の言葉に聞き、神の思いに従う者こそ「神の子ども」とみなされることを意味しています(「すなわち、肉による子供が神の子供なのではなく、約束に従って生まれる子供が、子孫と見なされるのです。」ローマの信徒への手紙 9:8)。

そして神は、「あなたたちを滅ぼすことはしない。立ち帰りを待っている」と約束されました。

大切なのは、その約束を信じ抜くことです(「主の成し遂げられた驚くべき御業と奇跡を／主の口から出る裁きを心に留めよ。」詩編 105:5)。たとえ人間の物差しでは不可能と思える事柄も、神は必ず成し遂げられます。事実、独り子イエスを救い主として与えられるなど、人間の想定を遙かに超えているではありませんか。

「主に不可能なことがあろうか。」「いや、ない」。そう信じ抜いて先達たちは主の御許へと召されていきました。私たちも今日、救いを約束された一人として信じ抜くことを約束しましょう。その思いを新たにして、日々過ごして参りましょう。